

## 朝日山地森林生態系保護地域 ⇒ 朝日山地森林生態系保護地域 へ再編

## 保護林の再編に関する検討

朝日山地森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。

■今後の検討課題：①朝日山地森林生態系保護地域に介在する「村山市朝日地区郷土の森」は、生態系保護地域と同類の植生を有しており、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むことを検討する。②旧郷土の森における地元市町村との保存協定の取り扱ひの検討が必要。

## 朝日山地森林生態系保護地域

設定目的：この地域の主要部分は、人為の介入がほとんど無く、我が国最大規模のブナ林等原生的な自然状態が維持されていることに加え、低地から高山帯まで広範な植生帯が存在し、亜高山帯針葉樹林を欠き低木林が発達する豪雪地特有の植生が見られるなど、変化に富んだ種々の生態系が展開し、多様な動植物が生息・生育している。これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資するため設定する。  
植生概況：海拔1,200m以下の低地はブナを主体とする山地帯（冷温帯性）落葉広葉樹がその自然植生の主要な部分を被っている。海拔1,200～1,400m以上の高地の斜面はナナカマド、ミネカエデ、ミヤマナラ、チシマザサなどの低木群落からなる偽高地帯が成立する。海拔1,600m以上の高地は、ハイマツ、ヤハズハンノキ、雪田植物、高山ハイデ、風衝草原などの群落が発達する。

## 村山市朝日地区郷土の森

設定目的：古くから地域の人々に親しまれてきた見事な原生林を保護するとともに、自然探勝や森林浴などに利用するなかで、地域振興にも寄与しながら、原生的なブナ林を長く後世に保存するために設定する。  
植生概況：ブナを主体とした広葉樹林が主体をなし、ブナをはじめ、トチノキ等の老齢の大径木が多く分布している。  
なお、郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。



## 南アルプス南部光岳森林生態系保護地域 + 白倉林木遺伝資源保存林 + 中ノ尾根山の森林植物群落保護林⇒ 南アルプス南部光岳森林生態系保護地域へ再編

## 保護林の再編に関する検討

南アルプス南部光岳森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。また、同類の植生を有し、隣接している「白倉林木遺伝資源保存林」と「中ノ尾根山の森林植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むこととする。

■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

## 南アルプス南部光岳森林生態系保護地域

設定目的：南アルプス最南端に位置し、光岳を始め中ノ尾根山等2,000mを超える一帯は、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な垂直分布が残されている。この原生林地帯は原生自然環境保全地域に指定されている等、森林生態系保護地域として後世に伝えていくにふさわしい森林であるため設定する。

植生概況：この地域は、2,000mを超える山々が連なる一帯で、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な森林の垂直分布が残されている。標高1,700m付近までの区域は、沢筋から山腹にかけてはブナ、ミズナラ、サウゲルミ、シオジ、カエデ類等の落葉広葉樹林、尾根付近ではウラジロモミ、コメツガ、ネスコ等の針葉樹林となっている。標高1,700m付近から上部は、コメツガを主体にウラジロモミ、トウヒ等の針葉樹林となっている。

## 白倉林木遺伝資源保存林

トウヒ、コメツガ等を主とした原生状態を保っている群落。保護林内は、コメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンシカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。

## 中ノ尾根山の森林植物群落保護林

設定目的：原生状態を保った代表的な天然林で、山地帯・亜高山帯・高山帯の森林植生の推移等が観察でき学術上貴重であり、これを保護するため設定する。

植生概況：モミ、ツガ、トウヒ、シラベ、ミズメ、ダケカンバ等の天然林。保護林内はコメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンシカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。



## 秩父山地森林生物遺伝資源保存林 + 十文字峠植物群落保護林 → 秩父山地生物群集保護林へ再編

## 保護林の再編に関する検討

秩父山地森林生物遺伝資源保存林は、標高1,120~2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有した、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このように、本生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、同類の植生を有し、隣接する「十文字峠植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、生物群集保護林に組み込むこととする。

■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保存地区は、稜線上の風衝地、赤沢岳石灰岩地、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している区域。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

## 秩父山地森林生物遺伝資源保存林

設定目的：標高1,120~2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有しており、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このため森林と一体となって自然生態系を構成する生物遺伝資源を自然生態系内に安定的、恒久的に保存することとし、将来の遺伝資源利用等に役立つつ、これらの森林を後世に引き継ぐものとして設定する。

植生概況：山地帯にはコメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹を主体に分布し、沢筋等の湿潤な立地ではミスナラ等の落葉広葉樹が見られる。亜高山帯にはシラビソ、ダケカンバ等が分布する。また、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している。

## 十文字峠植物群落保護林

設定目的：コメツガ、シラベ、トウヒ等の常緑針葉樹を主とする亜高山帯の天然林で、林相は極相を示し、原生状態を示す貴重な森林として設定する。

植生概況：コメツガ林、シラビソ-オオシラビソ群集からなる保護林である。ニホンシカの生息密度が高いため、生息状況調査と対策の検討が必要（生息密度管理対策）。



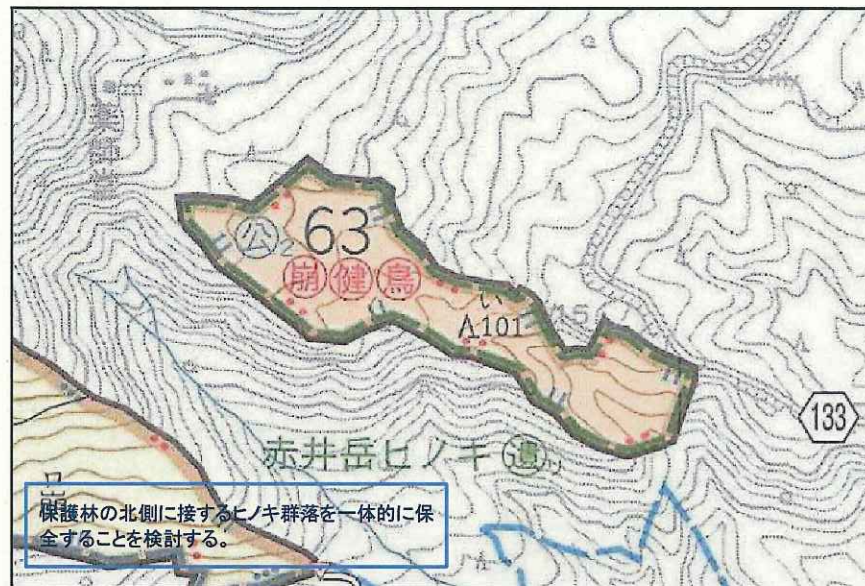
赤井岳ヒノキ林木遺伝資源保存林 ⇒ 保護林外にヒノキ群落が存在

保護林の再編に関する検討

赤井岳ヒノキ林木遺伝資源保存林は、天然生のヒノキ群落の保護を目的とした保護林である。②分布限界域に位置するヒノキの希少な個体群であり、③他の個体群から隔離された同種個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。なお、保護林の北側区域に接して存在する、保護林外のヒノキ群落は、県立自然公園に係る民有地のため、保護林区域の拡張は不可。

赤井岳ヒノキ林木遺伝資源保存林

設定目的：天然生ヒノキの遺伝資源を保存するために設定する。  
 植生概況：ヒノキの天然分布の北限にあたる。保護林内は、主に、スギ、モミ、アカマツが優占している。ヒノキは、尾根上に混生している。なお、保護林の北側の保護林外には、直径100cmを超えるヒノキ林が存在する。



赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林 ⇒ 保留

保護林の再編に関する検討

赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①周りをミヤマナラに囲われた雪崩地形の尾根部といった特殊な立地に成立しているスギの個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林を取り巻く同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。

赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林

設定目的：裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源を保存するために設定する。  
 植生概況：胸高直径40～80cmのスギが優占する林相。



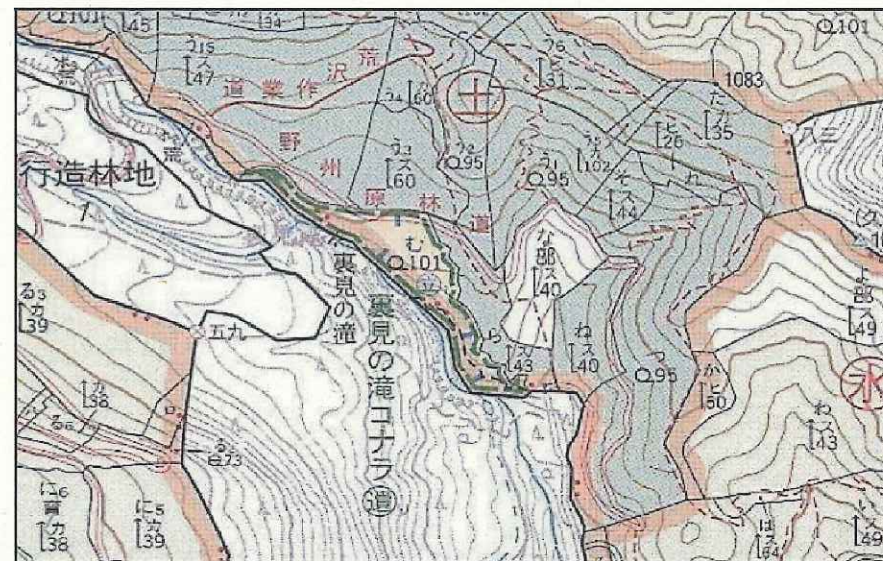
裏見の滝コナラ林木遺伝資源保存林 ⇒ 面積要件は満たしてはいるが、保護林区域の拡張を行わず、希少個体群保護林へ再編

保護林の再編に関する検討

裏見の滝林木遺伝資源保存林は、コナラ・クリの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしてはいるが、中間温帯林の低海拔地といった特殊な気候条件のもとに成立している、アカマツとコナラが混在した特徴的な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林とする。なお、保護林の周辺で同種の植生が分布する区域は民有林であるため、保護林区域の拡張は行わず、そのままの面積で移行させる。

裏見の滝林木遺伝資源保存林

設定目的：コナラ・クリの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：アカマツが優占する林にコナラとクリが混在する林相。高木層は高さ23m、胸高直径26-60cm（最大はコナラ）程度。



## 大久蔵トチノキ林木遺伝資源保存林 ⇒ 希少個体群保護林へ再編

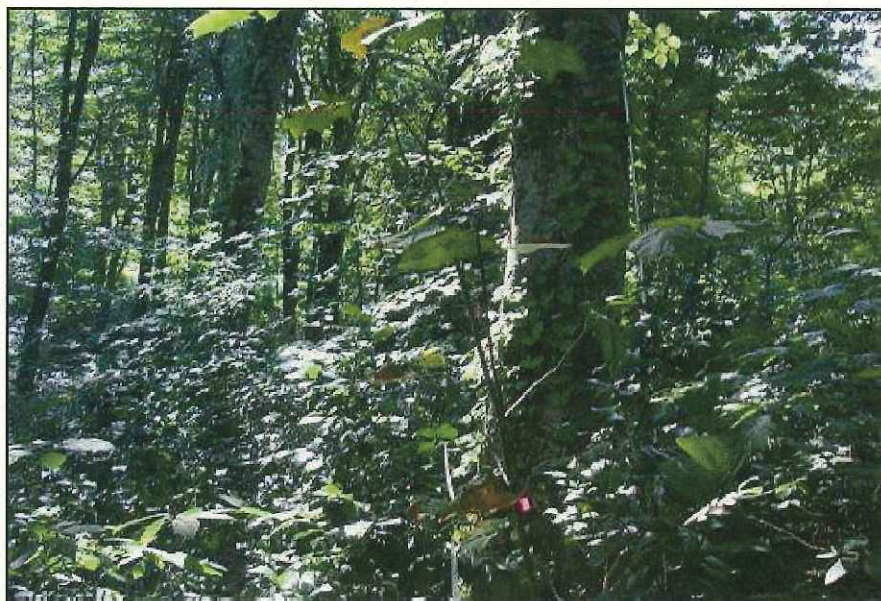
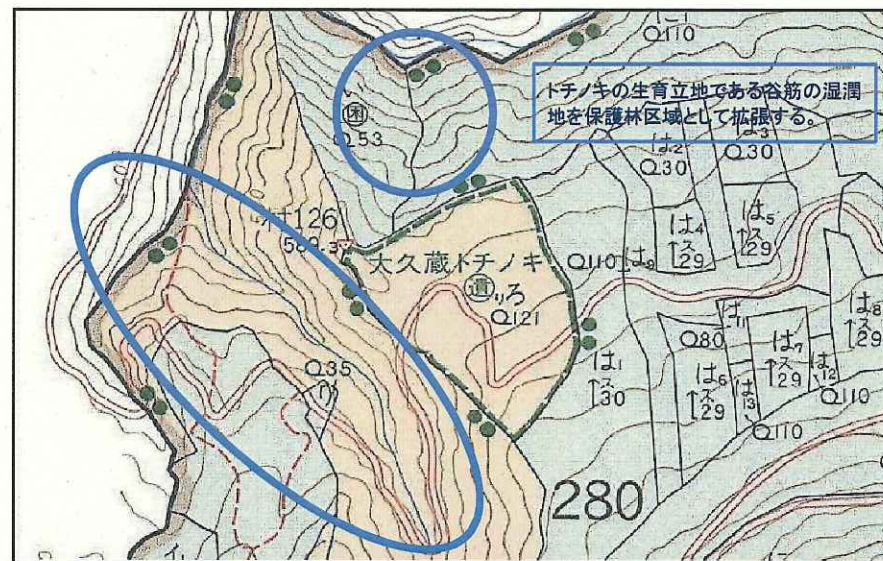
## 保護林の再編に関する検討

大久蔵トチノキ林木遺伝資源保存林は、裏日本型東北・北海道型におけるトチノキの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①大径木に生育している希少化した個体群、⑤谷沿いの過湿地といった特殊な立地に生育する個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。ただし、保護林内のトチノキは高齢化が進み、現存量が少ない状況にある。このため、保護林に隣接する谷地形や凹型地形のところには湿潤地を好むトチノキが混在している可能性があるため、そのような地形を有する林班を拡張の対象として検討する。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の西側に隣接している谷地形に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。

## 大久蔵トチノキ林木遺伝資源保存林

設定目的：裏日本型東北・北海道型におけるトチノキの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：ブナ・トチノキ林。トチノキの保存を目的とする保護林ではあるが、保護林内にはトチノキの生育は少ない。概ね中齢から高齢級のブナが優占し、大径木のトチノキ（胸高直系の最大134cm）が僅かに混生している程度。胸高直径40～80cmのスギが優占する林相。



## 小川ブナ群落林木遺伝資源保存林 + 小川ブナ植物群落保護林 + 定波シラカンバ植物群落保護林 ⇒ 小川低山帯ブナ 遺伝資源 希少個体群保護林へ再編

## 保護林の再編に関する検討

小川ブナ群落林木遺伝資源保存林は、低標高地に残存しているブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林であり、小川ブナ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているブナ群落の保護を目的とした保護林である。また、定波シラカンバ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているシラカンバ群落の保護を目的とした保護林である。このように、これらの保護林は、①大径木に生育したブナ・ミズナラ・コナラなどの希少化している個体群、②低山帯といった分布限界域に位置するブナの個体群、③温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される冷温帯性の個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。なお、これらの保護林は隣接して存在していることから、低標高地のブナに代表させた一つの保護林として再編する。

## 小川ブナ群落林木遺伝資源保存林

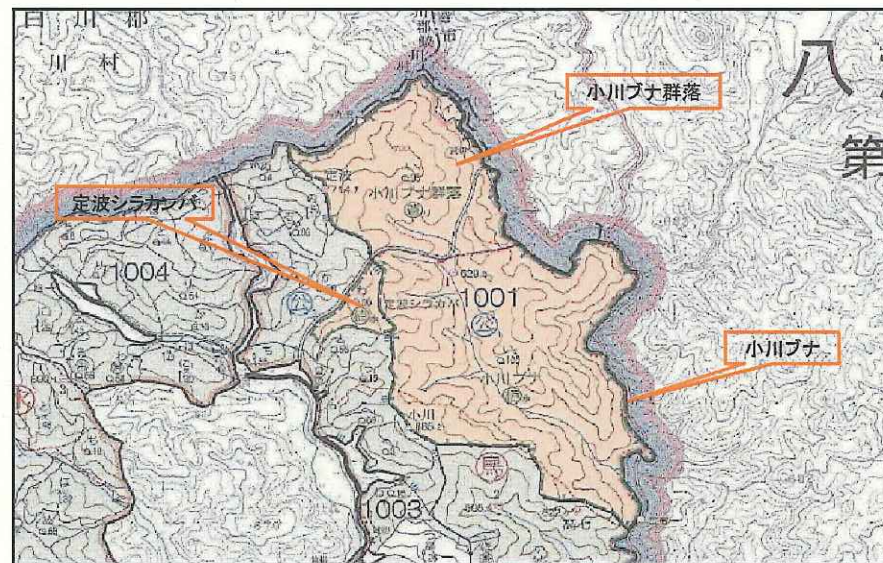
設定目的：林木育種事業を計画的、能率的に実施するため現存する林木の優良遺伝子群を確保し、これを保存し、遺伝子補給源として活用するために設定する。  
 植生概況：低標高地に生育するブナを含む群落。コナラ・ミズナラが優勢、ブナ（大径木）やイヌブナが散在している林相にある。高木層は高さ32m、胸高直径18-114cm(最大はブナ)、植被率100%で、ミズナラが優勢、コナラ、ブナなどが混生している。ただし、ブナの大径木は少なく、枯損が進行している。

## 小川ブナ植物群落保護林

設定目的：ブナ・ミズナラを主体とした代表的な温帯性原生林で、この地方では学術上貴重な森林であり、これを保護するため設定する。  
 植生概況：保護林内は全体的に樹高が低く、高木のブナは生育しているものの、高齢林には至らず成熟途上の段階にある。一部谷筋を主体に老齢成熟林が見られるが、老齢成熟段階にあるものはコナラやミズナラが主体となっている。

## 定波シラカンバ植物群落保護林

設定目的：県内におけるシラカバ自生地は非常に少なく、特に群生するシラカバは、この地方にとって学術上貴重なもので、これを保護するため設定する。  
 植生概況：コナラやヤマザクラなどの雑木類にシラカンバが混生している天然生林。高木層は高さ26m、胸高直径19-41cm(最大はシラカンバ)、植被率100%で、コナラが優勢、アカシデ、シラカンバ、カズミヅラ、ヤマザクラなどが混生している。





## 木戸川コナラ林木遺伝資源保存林 + 木戸川モミ・コナラ植物群落保護林 → 木戸川中間温帯コナラ 遺伝資源 希少個体群保護林 へ再編

## 保護林の再編に関する検討

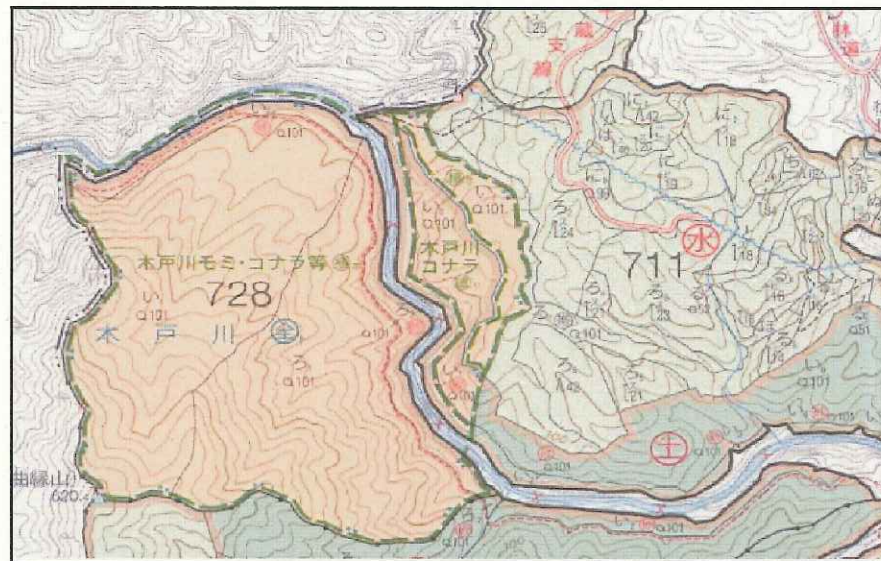
木戸川コナラ林木遺伝資源保存林は、中間温帯に成立しているコナラ天然林の遺伝資源を保存するために設定された保護林であり、木戸川モミ・コナラ等植物群落保護林も同様に、中間温帯のモミが混在したコナラ天然林の保護を目的とした保護林である。両保護林とも、②中間温帯域の天然林として貴重である。また、①高齢級のモミとコナラが混在した同類の林相にあり、隣接しているため、一体的に管理することが妥当と考えられる。このため、両保護林を統合した上で、希少個体群保護林として再編する。

## 木戸川コナラ林木遺伝資源保存林

設定目的：コナラの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：高齢級のコナラとモミが混在して優占する林相にある。コナラは非常に大きく、胸高直径80cm～90cmの個体が多く認められる。下層は1.5～2.0mのスズダケが5・5程度の被度・群度で保護林の全域で繁茂している。コナラの実生・低木は僅かで、今後はモミ林へと遷移していくと思われる。

## 木戸川モミ・コナラ植物群落保護林

設定目的：モミ、コナラ等落葉広葉樹を主とした針広混交林で、原生林に準じた林層を呈し、その遷移等学術参考及び森林施業上の考証として価値が高く、これを保存するため設定する。  
 植生概況：コナラとモミが優占する林相が広がっている。モミやコナラの胸高直径は70～90cm程度あり、高齢林の林相にある。また、林床は、高さ1.5～2.0mのスズダケが5・5程度の被度・群度で保護林全域に繁茂している。



## 切込・刈込湖コメツガ林木遺伝資源保存林 ⇒希少個体群保護林へ再編

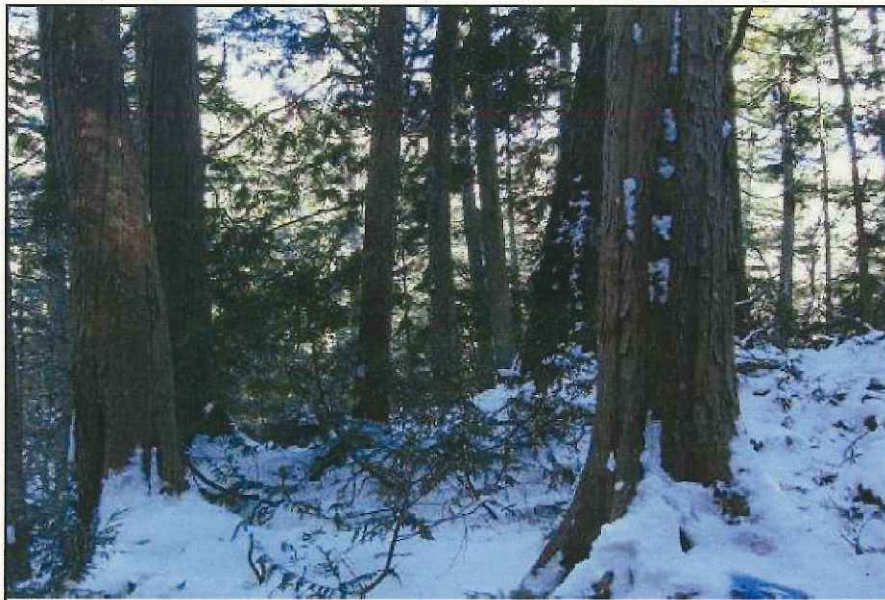
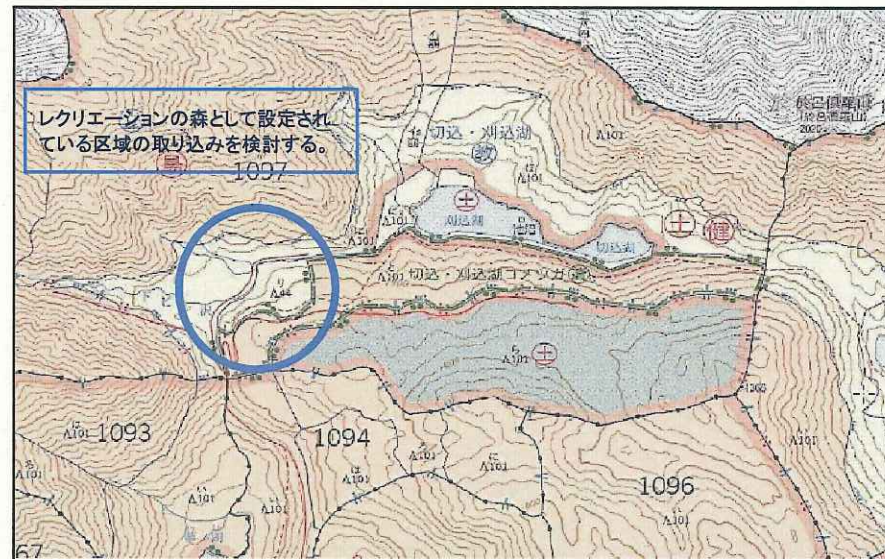
## 保護林の再編に関する検討

切込・刈込湖コメツガ林木遺伝資源保存林は、土壌が薄く礫の多い特殊な立地で土地的極相林を形成しているカラマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。③土地的極相林として成立しているカラマツの希少な個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林外の北西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。

## 切込・刈込湖コメツガ林木遺伝資源保存林

設定目的：天然林針葉樹の遺伝資源を保存するため設定する。  
植生概況：コメツガやアスナロなどが混交する針葉樹林。高木層は高さ30m、胸高直径15-90cm（最大はコメツガ）程度。



## 黒沢ウラジロモミ林木遺伝資源保存林 →希少個体群保護林 へ再編

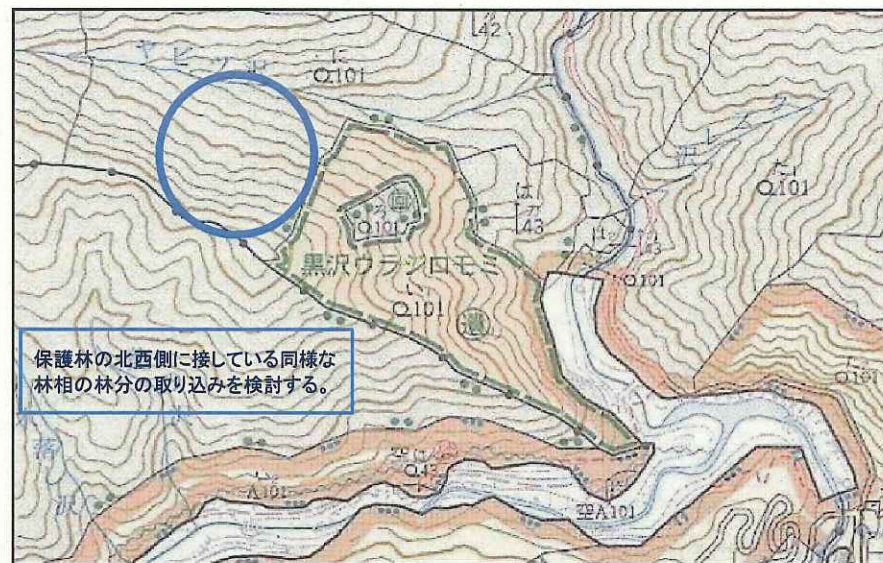
## 保護林の再編に関する検討

黒沢ウラジロモミ林木遺伝資源保存林は、岩角地といった特殊な立地に成立しているウラジロモミやクロベなどの針葉樹の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。⑤特殊な立地に生育している針葉樹の個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北西側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。

## 黒沢ウラジロモミ林木遺伝資源保存林

設定目的：天然生ウラジロモミなどの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：本保護林の大部分は急峻な岩角地に成立しており、岩角地上には、ウラジロモミ・クロベ・ヒメコマツなどが混在する針葉樹林が成立し、岩角地下部の崖錐堆積地に、サワグルミ・トチノキなどの広葉樹が優占する溪畔林が成立している。高木層は高さ19～33m、胸高直径25-120cm（最大はウラジロモミ）程度。



## 小松原ブナ林木遺伝資源保存林 + 小松原湿原植物群落保護林 ⇒ 小松原湿原 生物群集保護林 へ再編

## 保護林の再編に関する検討

小松原湿原植物群落保護林は、泥炭湿原と湿原植物の保護、および、ブナを主体としてオオシラビソの点生する天然林の保護を目的とした保護林である。このように、植物群落保護林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、再編に合わせ、隣接して存在し、ブナが優占して同様な林相にある「小松原ブナ林木遺伝資源保存林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、本生物群集保護林へ組み込むこととする。

■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、下屋敷、中屋敷、上屋敷の3段からなる泥炭湿原とすることを検討。②旧林木遺伝資源保存林である「小松原ブナ林木遺伝資源保存林」の今後の取扱いの検討。

## 小松原ブナ林木遺伝資源保存林

設定目的：裏日本型東北・北海道型におけるブナの遺伝資源を保存するため設定する。  
植生概況：崖斜面に成立している、チシマザサ-ブナ群団に区分されるブナ林である。林内は幾多の水  
流（小川）に浸食され、土砂崩壊も見られる。この浸食と積雪による影響からブナを含む林木の倒木、倒伏、  
枯損が多くみられる。本保護林に生育しているブナの胸高直径は30～60cm程度である。

## 小松原湿原植物群落保護林

設定目的：当該区域西側に広がる泥炭湿原と湿原植物の保護、および、ブナを主体としてアオモリトドマツ(=オオシラビソ)の点生する天然林の保護を図ることを目的に設定する。  
植生概況：小松原湿原は下屋敷、中屋敷、上屋敷の3段からなり、下屋敷から中屋敷の間にはブナ林があり、  
湿原の周囲はオオシラビソ林、ブナ林となり、湿原と森林の間にはアカミノイヌツゲ-クロハ群集のマント群  
落が成立している。湿原の大半はヌマガヤ-イボミスゴケ群集が占め、窪地の池にはミヤマホタルイ、ヤチス  
ゲなどが純群落を形成している。湿原の登山路はすべて木道が設置され、保護状態は良い。



西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林 + 千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林 + 千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ植物群落保護林  
 ⇒ 千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ・ヤチダモ 遺伝資源 希少個体群保護林 へ再編

#### 保護林の再編に関する検討

西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ植物群落保護林の三つの保護林は、何れも西ノ湖と中禅寺湖間の氾濫原に成立している湿潤立地性の天然林である（当該地域の谷型の天然林）。何れの保護林も、①ミズナラ、ハルニレ、ドロノキなどの大径木に生育した希少化した個体群を含み、⑤湿潤な立地を好むミズナラ、ハルニレ、ドロノキなどが混在または優占して生育する同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。

#### 西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林

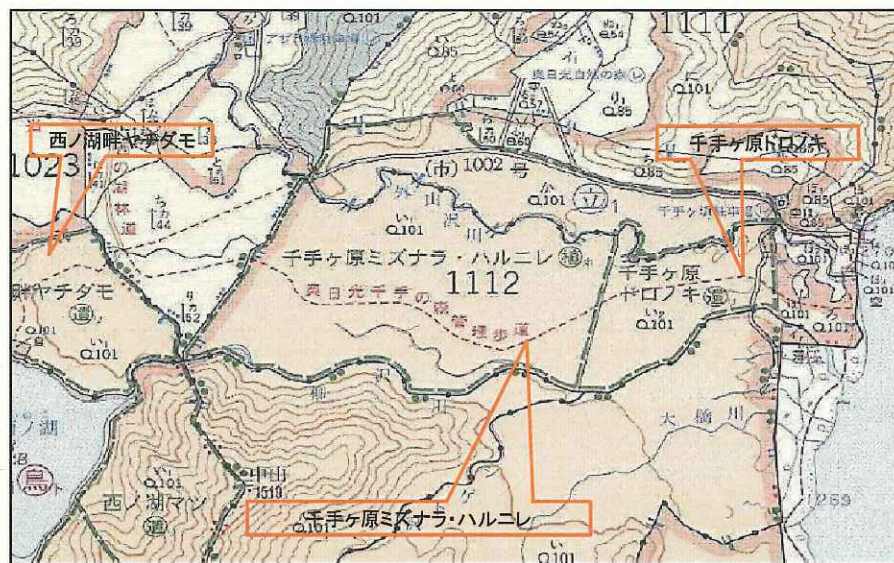
設定目的：ヤチダモの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：ミズナラとヤチダモの混交林が広がっている。湖畔域にヤチダモの優占する林分が見られる。木層は高さ38m、胸高直径24-90cm（最大はミズナラ）、植被率90%で、ヤチダモが優占し、ミズナラが混生している。

#### 千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林

設定目的：ドロノキの遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：ハルニレ、サワグルミ、オオバヤナギ、ミズナラ等の湖畔要素の樹種により構成される林分が広がっている。保存対象樹種であるドロノキは、保護林内ではほとんど確認されていない。

#### 千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ植物群落保護林

設定目的：奥日光地帯の代表的樹種であるミズナラ、ハルニレが群生、特にハルニレ林は奥日光地域でも少なくなっており、保護の必要があるため設定する。  
 植生概況：ミズナラ、ハルニレが優占する天然生林。戦場ヶ原湿原の南部に広がる標高約1300mの概ね平坦地に成立している。保護林内には、かつての氾濫原にミズナラとハルニレが混交する林分が広がる。高木層は高さ32m、胸高直径25-155cm（最大はミズナラ）程度。



## 西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林 + 西ノ湖ヤシオツツシ植物群落保護林 ⇒ 西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ 遺伝資源 希少個体群保護林 へ再編

## 保護林の再編に関する検討

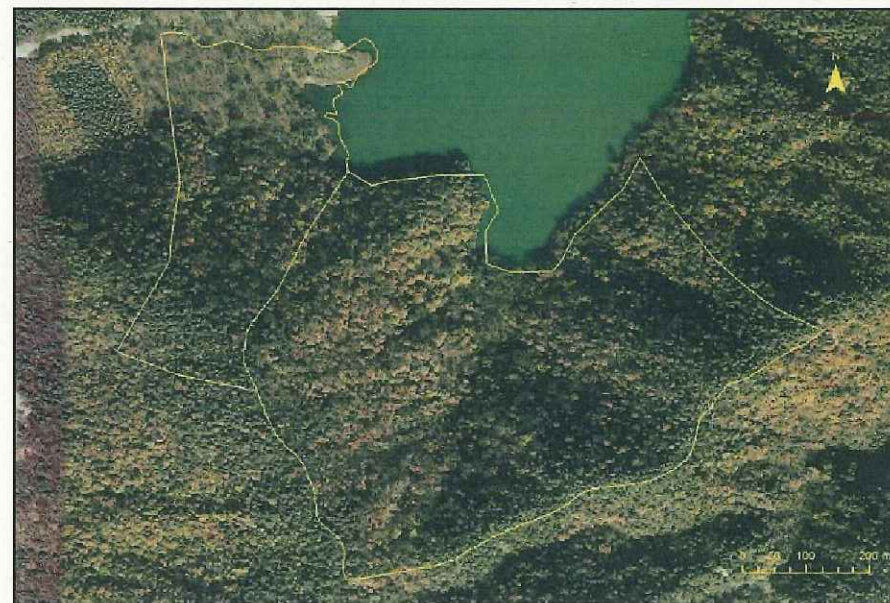
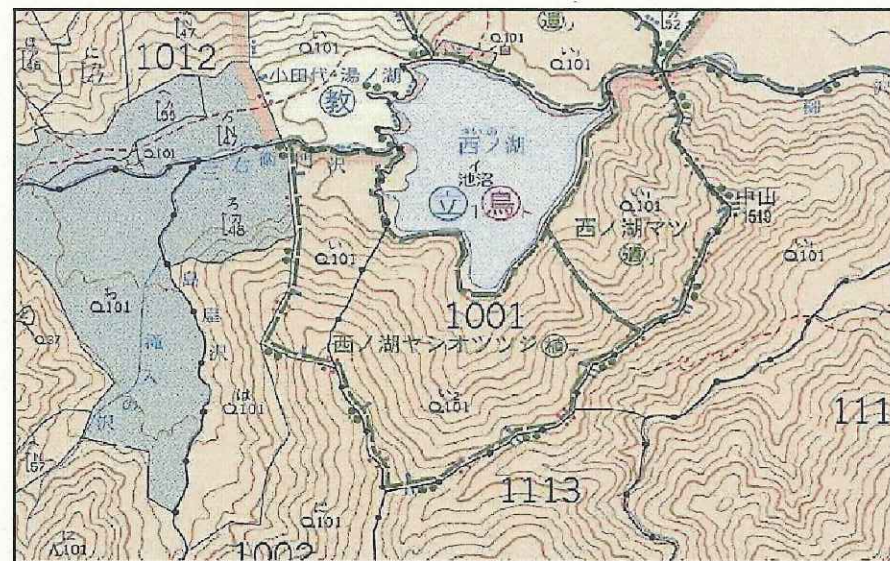
西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林、西ノ湖ヤシオツツシ植物群落保護林の二つの保護林は、何れも西ノ湖の東側から南側の稜線から山腹急斜面に成立している乾性立地性の天然林である（当該地域の尾根型の天然林）。何れの保護林も、①岩角地といった特殊な立地を好むヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、シロヤシオなどが混在または優占して生育している同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。

## 西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林

設定目的：チョウセンゴヨウ、ヒメコマツ等の遺伝資源を保存するため設定する。  
 植生概況：保護林内はコマツガが優占しており、ヒメコマツは尾根筋に散在している。シカ食害による影響のためか、下層植生は貧弱。保存対象樹種であるチョウセンゴヨウは、プロット周辺では確認されていない。

## 西ノ湖ヤシオツツシ植物群落保護林

設定目的：原生林に準ずる森林で学術及び森林施業上の考証として必要なもの。西ノ湖岸の原生林の保護を図るため設定する。  
 植生概況：保護林内には、フナ、ウダイカンバ、カエデ類の広葉樹に、コマツガなどの針葉樹も混生する天然生林が広がる。護林内は、胸高直径40～80cm程度のコメツガ・フナが優占し、シロヤシオが細尾根上に散在している林相にある。



白川カシ群落林木遺伝資源保存林 ⇒ 保留

保護林の再編に関する検討

白川カシ群落林木遺伝資源保存林は、暖温帯上部の常緑樹林を構成する樹種の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、②常緑広葉樹林帯の上地域域のカシ林として重要であり、④このような植生帯に生育する常緑広葉樹の遺伝資源の保護を目的としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北東側に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。

白川カシ群落林木遺伝資源保存林

設定目的：アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林である。林内には、ルリミノキ、カクレミノ等の大径木があり、多様な樹種構成を持つ林木遺伝資源として貴重なため設定する。  
 植生概況：アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林で、これらの常緑広葉樹にケヤキやオニイタヤ等の落葉広葉樹が混交する林分にあり、常緑樹、落葉樹ともに大径木により構成されている。保存対象樹種であるアカガシ・ウラジロガシなどの常緑広葉樹の最大胸高直径は96.0cm(25.0m)。植生遷移上の次世代を担う樹種として、中齢級のアカガシ、ウラジロガシ、カゴノキなどの常緑樹が林内に生育している。

